

雛がたり

泉鏡花作

大正六年三月

全一編

雛ひなーひな女め夫をと雛ひなは言いふもさらなり。櫻さくら雛ひな、柳やなぎ雛ひな、花はな
 菜なの雛ひな、桃ももの花はな雛ひな、白しろと緋ひと、紫むらさきの色いろの董すみれ雛ひな。鄙ひなに
 は、つくし、鼓たむらこ草くさの雛ひな。相あひ合あ傘がさの春はる雨あめ雛ひな。小こ波なみ軽かろく
 袖そでで漕こぐ淺あさ妻づま船ふねの調しらべの雛ひな。五にん人ばやし囃はやし子こ、官くわん女なんぢよたち。たゞ
 あの狎ちんひきと云いふのだけは形かたちも品しなもなくもがな。紙かみ
 雛ひな、島しまの雛ひな、豆まめ雛ひな、いちもん雛ひなと數かずふるさへ、しを
 らしく可なつかし懐いい。

黒くろ棚だな、御み厨づし子し、三さん棚だなの堆うづたかきは、われら町ちやう家うかの雛ひな壇だん
 には些ちと打うち上あがり過すぎるであらう。箏たんす、長なが持もち、挟はさ箱はこ、
 金きん高たか蒔まき繪え、銀ぎん金かな具ぐ。小こ指ゆびぐらゐな抽ひき斗だしを開あけると、
 中なかが紅あかいのも美うつくしい。一いち雙なうの屏びやう風ふうの繪えは、むら消きえ
 の雪ゆきの小こ松まつに丹たん頂ちやうの鶴つる、雛ひな鶴つる。一ひとつは曲まが水みづの群ぐん青じやうに
 桃ももの盃さかずき、花はな雪ゆき洞ほら、桃もものやうな灯ひを點ともす。一いち寸すん
 風ふう情じやうに舞まひ扇あふぎ。

白酒入れたは、ぎやまんに、柳さくらの透模様。

さて、お着には何よけむ、あはび、さだえか、かせよけむ、と榮螺蛤が唄に成り、皿の縁に浮いて出る。白魚よし、小鯛よし、緋の毛氈に肖つかはしいのは柳鰈と云ふのがある。業平蜆、小町蝦、飯鮓も憎からず。どれも小さなほど愛らしく、器もいづれ可愛いほど風情があつて、其の鯛、鰈の並んだ處は、雛壇の奥さながら、龍宮を視るおもひ。

(もし／＼何處で見た雛なんですえ。)
いや、實際六七歳ぐらゐの時に覚えて居る。母親の雛を思ふと、遙かに龍宮の、幻のやうな氣がし
てならぬ。

ふる郷も、山の彼方に遠い。

いづれ、金目のものではあるまいけれども、紅絲で底を結へた手遊の猪口や、金米糖の壺一つも、馬で抱き、駕籠で抱へて、長い旅路を江戸から持つて行つたと思へば、千代紙の小箱に入つた南京砂も、雛の前では紅玉である、緑珠である、皆敷妙の玉である。

北の國の三月は、まだ雪が消えないから、節句は
四月にしたらしい。冬籠の窓が明いて、軒、廂の雪
がこひが除れると、北風に轟々と鳴通した荒海の浪
の響も、春風の音にかはつて、梅、櫻、椿、山吹、
桃も李も一齊に開いて、女たちの眉、唇、裾八口の
色も皆花のやうに、はらりと咲く。羽子も手鞠も此
の頃から。で、追羽子の音、手鞠の音、唄の聲々。

ついて落いて、裁形、袖形、御手に、

蝶や 花。

恁る折から、柳、櫻、緋桃の小路を、麗かな日に
徐と通る、と霞を彩る日光の裡に、何處ともなく雛
の影、人形の影がニニふ。 暗香不動月黄
昏 朧夜には裳の紅、袖の萌黄が、色に出で遊
ぶであらう。

ー ー もうお雛様がお急ぎ。

と細い段の緋毛氈。こゝで桐の箱も可懐しさうに
抱しめるやうに持つて出て、指蓋を、すつと引くと、
吉野紙の霞の中に、お雛様とお雛様が、紅梅白梅の

面影に、ほんのりと出て、口許に莞爾とし給ふ。唯
見て、嬉しさうに膝に据ゑて、熟と視ながら、黄金
の冠は紫紐、玉の簪の朱の紐を結び参らす時の、あ
の、若い母の其の時の、面影が忘れられない。

そんなら孝行をすれば可いのにー

鼠の番でもする事か。唯臺所で音のする、煎豆の
香に小鼻を怒らせ、牡丹の有平糖を狙ふ事、毒のあ
る胡蝶に似たりで、立姿の官女が捧げた長柄を抜い
ては叱られる、お囃子の烏帽子をコツンと突いて、
また叱られる。

こゝに、小さな唐草蒔繪の車があつた。おなじ蒔
繪の臺を離して、轆を其のまゝに、後から押すと、
少し軋んで毛氈の上を、這る。其の心地は咲
亂れた櫻の枝を傳ふやうで、また、紅の霞の浪を漕
ぐやうな、そして、少し其の軋む音は、幽に、キリ
リ、と一種の微妙なる音楽であつた。仲よしの小鳥
が嘴を接す時、齒の生際の嬰兒が、輕焼をカリリと
噛む時、聞を澄すと、ふとこんな音がするかと思
ふ、ー話は違ふが、（らふたけたるもの）として、
（色白き兒の苺くひたる）枕の草紙は憎い事を言つ

た。

わびしかるべき莖だちの浸しもの、わけぎのぬたも時繪の中。惣菜ものゝ蜆さへ、雛の御前に罷出れば、黒小袖、浅葱の襟。海のもの、山のもの。筍の膚も美少年。どれも、食ものと云ふ形でなく、菜の葉に留まれ蝶と齎しく、彌生の春のともだちに見える。

袖形の押繪細工の箸さしから、銀の振出し、と云ふ華奢なもので、小鯛には骨が多い、柳鰈の御馳走を思出すと、あゝ、酒と煙草は極りが悪い。

其角句あり。――もどかしや雛に對して小盃。

あの白酒を、一寸唇につけた處は、乳の味がしはしないかと思ふ。一寸ですよ。

――構はず注ぎねえ。

なんかで、がぶ／＼遣つちや話に成らない。

金岡の萩の馬、飛驒の工匠の龍までもなく、電燈

を消して、雪洞の影に見参らす雛の顔は、實際、唯
瞻れば瞬きして、やがて打微笑む。人の悪い官女の
じろりと横目で見るのがある。――壇の下に寝て居
ると、雛の話聲が聞える、と小児の時に聞いたのを、
私は今も疑ひたくない。

で、家中が寝静まると、何處か一ヶ所、小屏風が、
鶴の羽に桃を敷いて、すつと廻らうも知れぬ。

御睦ましさにつけても、壇に、餘り人形の数の多
いのは風情がなからう。

但し、多いにも、少いにも、今私は、雛らしいも
のを殆ど持たぬ。母が大事にしたのは、母がなくな
つて後、町に大火があつて皆焼けたのである。一度
持出したとも聞かぬが、混雑に紛れて行方を知らない。
あれほど氣を入れて居たのであるから、大方は例の
車に乗つて、雛たち、火を免れたのであらう、と思
つて居る。

其の後恚う云ふ事があつた。

尚はそれから十二三年を過ぎてゝある。

逗子に居た時、静岡の町の光景が見たくつて、三
月の中ばと思ふ。一度彼處へ旅をした。淺間の社で、
釜で甘酒を賣る茶店へ休んだ時、鳩と一所に日南ば
つこをする婆さんに、阿部川の川原で、櫻の頃は土
地の人が、毛氈に重詰もので、花の酒宴を開く、と
言ふのを聞いた。――阿部川の道を訊ねたについて
ある。――都路の唄につけても、此處を府中と覺
えた身には、静岡へ来て阿部川餅を知らないでは濟
まぬ氣がする。これを、をかきなものゝ異名だなぞ
と思はれては困る。確かに、豆粉をまぶした餅であ
る。

賤機山、淺間を吹降す風の強い、寒い日で。寂し
い屋敷町を抜けたり、大川の堤防を傳つたりして阿
部川の橋の袂へ出て、俵は一軒の餅屋へ入つた。

色白で、赤い半襟をした、人柄な島田の娘が唯一
人で店に居た。

――此が、名代の阿部川だね、一盆おくれ。――
と精々喜多八の氣分を漾はせて、突出し店の硝子
戸の中に飾つた、五つばかり装つてある朱の盆へ、

突如立つて手を掛けると、娘が、まあ、と言つた。

―― あら、看板ですわ　――

いや、正のものの、膝栗毛で、聊か気分なるものを
様はせ過ぎた形がある。が、此處で早速頼張つて、
吸子の手酌で飲つた處は、我ながら頼母しい。

ふと小用場を借りたく成つた。

中戸を開けて、土間をずつと奥へ、と云ふ娘さん
の指圖に任せて、古くて大きい其の中戸を開けると、
妙な建方、すぐに壁で、壁の窓からむかう土間の臺
所が見えながら、穴を抜けたやうに鈎の手に一つ曲
つて、暗い處をふつと出ると、上框に縁がついた、
吃驚するほど廣々とした茶の間。大々と爐が切つて
ある。見事な事は、大名の一たてぐらゐは、樂に休
めたらうと思ふ。薄暗い、古疊。寂として人氣がな
い。
猫も居らぬ。爐に火の氣もなく、茶釜も
見えぬ。

遠くで、内井戸の水の音が水底へ響いてボタン、と鳴る。不思議に風が留んで寂寞した。

見上げた破風口は峠はど高し、とぼんと野原へ出たやうな気がして、縁に添ひつゝ中土間を、圍爐裡の前を向うへ通ると、桃櫻ニと輝くばかり、五壇一>面の緋毛氈、やがて四疊半を充満に雛、人形の數々。

ふと其の飾つた形も姿も、昔の故郷の雛によく肖た、と思ふと、どの顔も、それよりは蒼白くて、衣も冠も古雛の、丈が二倍ほど大きかった。

薄暗い白晝の影が一つ一つに皆映る。

背後の古襖が半ば開いて、奥にも一つ見える小座敷に、また五壇の雛がある。不思議や、蒔繪の車、雛たちも、それこそ寸分違はない古郷のそれに似た、と思はず伸上りながら、ふと心づくくと、前の雛壇におはするのが、いづれも尋常の形でない。雛は兩方さしむかひ、官女たちは、横顔やら、俯向いたの。

お雛子はぐるり、と寄つて、鼓の調糸を緊めたり、
解いたり、御殿火鉢も樂屋の光景。

私は吃驚して飛退いた。

敷居の外の、苔の生えた内井戸には、いま汲んだ
やうな釣瓶の雫、――背戸は桃もたゞ枝の中に、眞
黄色に咲いたのは連翹の花であつた。

歸りがけに密と通ると、何事もない。襖の奥に雛
はなくて、前の壇のも、烏帽子一つ位置のかはつた
のは見えなかつた。――此の時に慄然とした。

風は其のまゝ留んで居る。廣い河原に霞が流れた。
渡れば鞠子の宿と聞く 梅、若菜の匂にも聞え
る。少し渡つて見よう。橋詰の、あの大樹の柳の枝
のすら／＼と淺翠した下を通ると、樹の根に一枚、
緋の毛氈を敷いて、四隅を美しい河原の石で壓へて
あつた。雛市が立つらしい、が、繪合の貝一つ、誰
も居らぬ。唯、二三町春の眞晝に、人通りが一人も
ない。何故か憚られて、手を觸れても見なかつた。

緋の毛氈は、何處のか座敷から柳の梢を倒に映る雛壇の影かも知れない。夢を見るやうに、橋へかゝると、此も白い虹が来て群青の水を飲むやうであつた。あれ／＼雀が飛ぶやうに、おさへの端の石がころ／＼と動くと、柔かい風に毛氈を捲いて、ひら／＼と柳の下枝に搦む。

私は愕然として火を思つた。

何處ともなしに、キリリキリりと、軋る轆の車の

響。

鞠子は霞む長橋の阿部川の橋の板を、彼方此方、ちら／＼と陽炎が遊んで居る。

時に蒼空に富士を見た。

若き娘に幸あれと、餅屋の前を通過ぎつゝ、
「いねー
若い衆、綺麗な娘さんだね、いゝ婿さんが持たせた
いねー」

「ーえゝ、餅屋の婿さんは知りませんが、向う側のあの長い塀、それ、柳のわきに裏門のありますお邸は、
…旦那、大財産家でございましてな。つい

近い頃、東京から、それは／＼美しい奥さんが見え
ましたよー
何と怗うした時は、見ぬ戀にも憧憬れよう。

欲しいのはーもしか出来たらー 修紫の源氏
雛、姿も國貞の錦繪ぐらゐな、花桐を第一に、藤の
方、紫、黄昏、桂木、桂木は人も知った朧月夜の事
である。

照りもせず、くもりも果てぬ春の夜の
此の邊は些と酔つてるでせう。

【完】